

『カド爺』

夜桜 酒造

1,368 文字

あらすじ

イタズラばかりしていた夏休みの僕たち。101号室に住む爺さんからは怒られてばかりだった。30年ぶりに訪れた公園で見たものは……。

「コラア悪ガキども！！」

しわがれた声が公園に響く。

「カド爺が出たぞー！」

僕たちは一斉に、蜘蛛の巣を散らすように逃げた。カド爺と呼ばれる、101号室に住むお節介爺さんが、ベランダから大声を張り上げた。家から出てくるカド爺と、木の陰で様子を見守る僕たち。水飲み場に近付いたカド爺は、勢いよく蛇口をひねった。飲み口へ詰め込んだ砂が、水圧に押されて吹き出る。カド爺の顔は水と砂でぐちゃぐちゃになった。

「あははははは！」声を合わせて笑う僕たち。

「このお、もう許さんぞ！」と、水に負けぬ勢いで叱り飛ばすカド爺を背に、僕たちは駆け足で公園を後にした。

翌日、母さんと買い物へ行った帰りに公園を通ると、水飲み場は綺麗に磨かれていた。砂だらけの蛇口も、泥だらけの土台も、全て綺麗になっていた。

「カド部屋のお爺ちゃん、いつも掃除してくれるのよね。あんた、ちゃんと使いなさいよ？」

母さんは僕の頭を叩き、分かったわねと念を押した。

できたばかりのニュータウンは、夏の夕日を受けて橙色に輝いていた。

あれから30年。盆休みに実家を訪れた。あれほど大きく、あれほど美しく立ち並んでいたニュータウンは、使命を終えた老木のようにくすんでいた。駐車場を降り、妻と息子と共にあの公園を横切る。いつも子供の声で溢れていたはずの公園は閑散としており、蝉の声だけが煩わしいほどに耳をつく。私たちの遊んだ遊具は安全のためか取り外され、雑草に囲まれたベンチだけが取り残されていた。注意書きと書かれた看板は、野球禁止、木登り禁止、花火禁止と、ありとあらゆる子供の遊びを禁じている。

ふと、あの人を思い出した。思えばカド爺は、あれだけ私たちが叱り飛ばしながらも、追い出したりはしなかった。全力で遊ばせ、全力で叱った。それに気付いた私はいても立ってもいられず、あの水飲み場へ駆け寄った。怪訝そうについて来る息子に目もくれず、30年前と同じ場所にある水飲み場の、蛇口をひねった。

カラカラカラ

乾いた音を立て、蛇口は空回りした。

破れかけの張り紙には「水質汚染・使用禁止」と書いてある。サビだらけの蛇口、泥だらけの土台。容赦なく照りつける日差しと、止まぬ蝉。101号室に住んでいた、あの人の声を鮮明に思い出す。何かにすがるように振り返り、角の部屋を目で探した。大声の発生源であったベランダには物干し竿一つない。カーテンすらかかかっていない暗い窓は、そこが空き室であると告げていた。

「ごめんなさい」

水飲み場の前で固まった私は、何度も、あの頃言えなかった言葉をつぶやいていた。

翌朝、夏休みゆえの夜更かしに疲れ眠る息子を残し、私は水を張ったポリバケツと洗剤を手に、公園へと向かった。早朝とはいえ真夏の日差しは厳しい。タオルと麦わら帽子は準備している。夏の男に抜かりはない。誰もいない公園の、水飲み場を前に腰を落とした私は、一つ一つ、汚れを落とし始めた。

腰に据え付けてきたペットボトルのスポーツドリンクが空になるころ、見るに堪えない状態だった水飲み場は、当時と同じというわけにはいかないものの、それなりに綺麗になった。

悲鳴を上げる腰を支えながら立ち上がり、磨き終えた蛇口を満足げに眺める。息を一つ吐き、振り返った先に、101号室のベランダが見えた。

「ありがとう」

頭を下げた私の耳に届いたのは、夏の終わりを告げる蝉の声だけであった。